
1. 全体編

1-1. AI概要(1～3時限目)に関する学び

1. 理解度と印象

- 多くの回答で「AIの仕組みや活用例に触れて、以前より身近に感じられた」との感想が見られました。
- ただし「深層学習の内部構造や、データ不足による誤認」など、アルゴリズムの詳細は難しく感じたという回答も散見されます。

2. 興味を持った内容

- 「画像生成AI(Pa写など)」「チャット型AI(AIミネルバくん)」など、操作がわかりやすく結果がすぐに見えるものに興味を持つ学生が多かったようです。
- 「AIが間違える例」や「AIを学習させる工程」を体験して、AIを正しく動かすためのデータや指示がいかに重要かを認識したという意見も複数あります。

3. 今後の活用イメージ

- 「レポート作成や発表資料づくりにAIの生成機能を活かしたい」「自分の疑問を対話型AIに質問してみたい」など、学習の補助や情報検索の一環として使えそうだという声が多い。
- 一方で「間違った情報が返ってくることもあるので、AIをうのみにせず活用したい」という慎重な姿勢も見られます。

1-2. 「考える」(4～5時限目・6～7時限目 前編・後編)に関する学び

1. 考えることに対する認識変化

- 多くの学生が「客観的」「論理的」というキーワードを意識するようになり、これまで“なんとなく”考えていた部分を言語化したことで新たな視点を得たと回答。
- 「主観」「先入観」などにとらわれず、「曖昧なまま判断しない」「データや根拠に基づいて考える」重要性を改めて感じた意見が多い。

2. 具体的なキーワードの理解

- 「認知バイアス」「合理的思考」「直感的思考」などの用語について、クイズや演習を通じて学んだという回答が散見されます。
- ただし、一部の学生は「そもそも言葉の意味がわからない」「なんとなく理解したが、自分の中では整理しきれていない」と回答しており、もう少し事例を交えた学習を希望する声もあるようです。

3. 今後の活用や可能性

- 「課題やレポートを書く際、主観と客観をしっかりと区別する」「プロジェクトやグループワークで意見をまとめるとき、データに基づいて話し合いたい」など、学習・コミュニケーションの質を高めたいとの意見が目立ちます。
- AIを活用するにあたって、自分の「問い」や「指示」が曖昧だと誤った答えが返りやすいという点で、「考える」内容を明確にすることが大切だと気づいた学生が複数いるようです。

1-3. 「伝える」(4～5時限目・6～7時限目 前編・後編)に関する学び

1. 伝えることの意識づけ

- 「主観」「曖昧」「先入観」といった要素がコミュニケーションを混乱させる原因になると学んだ学生が多い。
- 「具体的な比較対象やデータを示す」「誰にでもわかる物差しを使う」ことで、相手に誤解なく伝えられるという気づきが得られています。

2. 今後のコミュニケーションへの応用

- 「グループワークやプレゼンで、具体例や数値を示して説得力を上げたい」「自分が思っていることを相手が同じように理解してくれるとは限らないので、言い方を工夫したい」という意見が多い。
- AIとの対話でも「正確に伝える・具体的に指示することで、より役立つ応答を得られる」という姿勢が生まれ、実生活や学習にも応用できると感じた学生が目立ちます。

2. デジタル創造科編

アンケートには「デジタル創造科」と明示された回答が含まれており、それらの回答を中心にまとめた内容です(回答内容に存在しない声の捏造はしていません)。

1. AI活用への関心

- デジタル領域に興味がある学生が多いためか、画像生成AIやプログラミングを通じたAI開発プロセスにも関心が集まっている回答が複数見られます。
- 「自分たちでAIのモデルを組んだり、データを用意して学習させてみたい」という意欲を示す学生もあり、クリエイティブな活動(イラスト、動画編集など)への応用を想定する声があります。

2. 考える・伝える視点の活用

- デジタル創造科という性質上、作品制作やプロジェクト型学習も多いとみられ、「自分のアイデアを形にするとき、主観だけでなく客観的な判断も取り入れたい」「ユーザー視点のデータを集めてAIに学習させると面白そう」といった回答があります。
- 他者に作品やプロジェクト内容を説明するとき、曖昧な表現を避け、伝えたい要素を具体化することの大切さを認識したというコメントが散見されます。

3. 今後の可能性・課題

- 可能性: 「AIを組み込んだ新しい作品づくり」「プログラミングやデザインにAIの補助を活用する」など、デジタルならではの活用イメージが一部であがっています。
 - 課題: AIの仕組みやデータ構築には専門的な知識が必要であり、「学習を深める環境やプロジェクトがあれば取り組んでみたいが、今は難しそう」という声もあります。
-

3. まとめ

1. 全体的な成果

- **AI概要:** AIの実態や活用事例を体験し、「AIは便利で可能性があるが、正しく使うにはデータや指示の工夫が必要」という認識が広まった。
- **考える:** 「客観的」「論理的」「認知バイアス」などのキーワードを通じて、ただの思いつきでなく根拠に基づいた思考を行う重要性を理解する学生が増えた。
- **伝える:** 自分の主張を明確に具体化し、相手に分かりやすく伝えるために「曖昧を減らす」「根拠を示す」などの工夫が必要だと学んだ学生が多い。

2. デジタル創造科ならではの特徴

- AIやデジタル技術への関心が高く、自分たちのクリエイティブ活動やプロジェクトでAIを取り入れてみたいという声が見られる。
- **考える・伝える力**に関しても、「ユーザー視点」「データの活用」「プレゼン力」など、デジタルの制作現場に必須の要素としてより実践的に感じた学生がいるようだ。

3. 今後の発展・提言

- **AI活用:** 更なるプログラミングやデータサイエンスの学習機会を設けることで、デジタル創造科の学生がより高度なAI応用に挑戦できる可能性が高い。
 - **考える・伝えるの定着:** 普段の制作課題やプレゼン課題などに「客観的かつ論理的な思考」「明確な根拠を示す伝え方」を積極的に取り入れ続けることで、学習効果が長期的に発揮されると期待される。
-